

平成 26 年度帰国教員報告会資料

中国蘇州日本人学校での教育実践

前蘇州日本人学校

坂戸市立城山小学校 校長 杉本竜之

1 はじめに

蘇州市は、江蘇省南部に位置し、東は上海、南は浙江省に面し、西には太湖、北には長江を望む場所に位置している。気候は温和で四季がはっきりしており、土地が肥沃で食品等の物産が豊富である。運河と名城の観光都市としても有名であり、園林、庭園、文物古跡が多く、拙政園等 9 つの蘇州古典園林が世界遺産に登録されている。上海までは、車で約 1 時間半、80 km の距離にある。現在では、全市人口約 630 万人、外資企業関連の会社が多く、日系企業もたくさん進出している。駐在する日本人は、約 6000 人とされており、治安がよく、住みやすいところである。

平成 23 年 3 月 10 日に蘇州に赴任し、校舎新築、移転という記憶にも記録にも残る大事業も含め、平成 26 年 3 月に蘇州を去ったこの 3 年間の活動を何点かに絞って報告する。

2 蘇州日本人学校の新校舎建築そして移転について



建設用地

平成 23 年 3 月に赴任し、新校舎建築、校舎移転の事業があることを正式に連絡される。平成 23 年度当初の準備と共に校舎の基本設計の素案に取り組む。4 月 11 日始業式。4 月下旬、学校側の意向を汲んだ日系建築業者作成の基本設計図を蘇州市政府に提出。総建築面積や教室等のデザインや施設設備などについての数多くの交渉が始まる。建築資材、建築様式などについても連日の要請交渉。特にトイレと手洗いの場所と数において政府側と考えの相違があった。これは、中国と日本の文化の違いであるが、なんとか折衷案を見つけ折り合いをつけていった。8 月初旬、上海総領事館より政府に新校舎建築について陳述書を提出。これを受けて、学校側と



着工式

政府側で基本合意に至る。8 月中旬、政府、設計院、財政局、アドバイザーの日系建築業者、学校側で連日の会議。校舎受け渡しは、9 月 15 日に決定。これを受けて平成 24 年 10 月の国慶節明けに新校舎での授業開始を想定した。9 月 8 日着工式が挙

行される。9 月 13 日校舎配置、電気、エアコン、配管排水、放送システム等の施工図設計の要望書の最終提出を行った。10 月より、第 2、4 週木曜日に定



建築現場

政府側で基本合意に至る。8 月中旬、政府、設計院、財政局、アドバイザーの日系建築業者、学校側で連日の会議。校舎受け渡しは、9 月 15 日に決定。これを受けて平成 24 年 10 月の国慶節明けに新校舎での授業開始を想定した。9 月 8 日着工式が挙

例校舎建築・移転定例委員会が行われる。通常の学校運営、授業を行いながら、設計図や巻尺を持ち、多い日には一日2回の現場確認に出向く日々が続く。そんな中でも9月24日には、運動会を実施した。極力、新築移転を理由に児童生徒に迷惑をかけないという大前提の元、このように教職員は、通常の学校行事や授業を行いながら、校舎建築そして校舎移転にむけての作業を進めていった。適材適所で担当者を割り振り、明確な目標、具体的な作業内容、期限を確実に示し、進捗状況を常に掌握しながら進めた。平成24年度は、

10月の校舎移転のため休校日を設定し、その分2学期開始を例年より早めて授業日数を確保する年間計画を策定した。建築工事のチェックは継続して行った。一方、移転業務担当者が綿密な作業計画、人員配置を明確にした移転マニュアルを作成し、移転作業に備えた。9月15日（土）大規模なデモがあり、かなりの緊張状態になり17・18日は休校措置



をとるに至った。予定していた9月22日の旧校舎での最後の運動会も延期となってしまった。9月28日、最後の授業そして校舎お別れ会を行った。移転作業は、全教職員一丸となり一人一人が責任を自覚し、綿密な計画に従い着々と進めた。教頭として、常に進捗状況を正確に把握し、迅速な対応、明確な指示を心がけ、混乱は極めて少なかった。結果、全ての作業が終わり、10月15日の新校舎での授業開始に至った。この日、児童生徒の登校を待ち受けた教職員の晴れやかな笑顔はとても印象に残っている。また、新校舎に響きわたる子どもの声は、新校舎に命を吹き込んでいくように感じた。設計・建築・移転の



流れのなかで、中国と日本の文化の違いがあったり、難しい折衝があったり困難を極めたが、運営委員長、校長の指示のもと、教頭として適材を適所に配置し、任せ・見守り・認めながら、それぞれの持ち味を十分に出し切ったからこそできた事業であったと実感している。非常に達成感を持つことができた。

3 蘇州の企業を訪問し、教職員の資質の向上を目指した研修について

平成23年7月無錫村田電子有限公司へ教職員研修のため訪問した。村田電子は、CS（顧客満足度）とES（従業員満足度）を経営の最上位の価値観としている。具体的には、「もっとお客様のことを考えてビジネスができる会社になりたい」「職場には、仕事と会社に誇りを持った社員でいっぱいになりたい」と副総経理より説明があった。お客様を児童生徒、保護者に言い換え、会社を学校に変えれば、これこそまさに目指す学校になる。「企業運営には理念と戦略が必要。利益が出ないのは、理念ではなく戦略が問題」「CSとESを優先す

る風土を作るには、経営層、事業主、管理職の姿勢が重要」「目的（CS と ES の実践で社会・文化の発展に貢献する）を追求した結果として、目標（売上・利益）が達成される。」このような企業の理念を学ぶことができた。さらに、リーダーシップの基本は、①組織方向性②ストレッチ目標③権限委譲、進捗状況確認④4つ褒め1つしかる⑤正しい評価⑥公正な処理である。リーダーは、この6点を常に意識して従業員を引っ張っていかなくてはならない。ここ中国で多くの中国人従業員を使い、企業として成り立っていくための理念を学ぶことができた。教職員にとっては、今後の教育活動学校そして私にとっては学校経営・運営に必ず生かせると確信した。

平成26年1月トヨタ自動車研究開発センター有限会社（TMEC）に訪問し教職員研修を行った。研修の最初に豊田社長のビデオを視聴した。社長自らがレーシングカーのハンドルを握り、その実体験を共通言語として社員と会話をしていくという発想力・実行力に凄まじさを感じた。また、「お客様の期待を超える」「人々を安全安心に運び、心までも動

TMEC 職員研修



かす」「お客様そして社会の為に将来を見通す先見性を持ち、何をすべきかを考え、今為すべきことを実行する」「負の要素は究極的にゼロへ、正の要素は最大化へ、その為の挑戦を終わることなく続ける」「常に時代の一步先のイノベーションを追い求めること」「地球環境に寄り添う意識を持ち続け、地球をできるだけ長生きさせる」「無駄の回収、この考え方がハイブリッドの基本」などの説明からトヨタの企業精神の一端を垣間見た気がした。テストコースや実験棟の見学もでき、とても充実した研修となった。学校にありがちな前例踏襲ではなく「今よりもっとよい方法がある」という積極的な姿勢と「保護者、児童生徒の期待を超える学校」を実現しようと、訪問した全教職員が決意を新たにした。

4 蘇州に係る歴史の研究および中国の伝統文化の研究について

呉の国は、春秋時代の紀元前514年に呉王の闔閭（こうりよ）の命を受けた伍子胥（ごしよ）が堅牢な都城を築いたのが始まりである。呉越戦争は、紀元前504年頃が始まりである。この呉越戦争を巡っては、登場人物の人間性、リーダーの資質、参謀としての視点、危機管理などについてたくさんの興味深いものがあり、これについて研究をはじめた。呉の国では、呉王闔閭と次の呉王夫差、丞相の伍子胥・伯嚭（はくひ）、軍師の孫子（孫子が「孫子の兵法」を書いたといわれているのが、蘇州の穹窿山である。）らが主要な人物である。一方、越の国では、越王勾践（こうせん）、名臣范蠡（はんれい）、名臣文種（ぶんしょう）などが登場している。この呉と越の戦争では、「屍に鞭打つ」「呉越同舟」「臥薪嘗胆」「満を持す」「牛耳をとる」「会稽の恥を注ぐ」などの有名な文言が生まれた。この呉

越戦争の舞台になった場所を訪ね、様々な関係書籍を読み、研究を進めた。孫子の「兵法」や両国の丞相の伍子胥と范蠡の大王の補佐役としての言動、そしてまさに「臥薪嘗胆」の日々を過ごし、遂には目的を達成する越王勾践の意志力、忍耐力、実行力には心が動いた。



この研究を通して得たものを、今後の職責を全うするための教訓にしていこうと考えた。

「太極拳」は、東洋哲学の重要概念である太極思想を取り入れた拳法で中国の代表的な武術である。太極拳の健康効果は古くから知られていたが、その習得は容易ではない。そこで1956年、新中国政府は人民の体位向上を図るために「簡化太極拳（二十四式太極拳）」を制定した。これが制定拳の始まりである。制定拳という名称は本来、「国家が制定した套路」という意味を持つ。健康・長寿によいとされているため、格闘技や護身術としてではなく健康法として習っている者も多く、蘇州でも市民が朝の公園などに集まって練習を行っている。私は、平成23年6月から家族全員で、蘇州人の胡明紅老師から太極拳の指導を受けた。24式、56式を習得し、個人また家族全員で大会に参加することができた。太極拳は体質を改善し、健康の増進に著しい効果があると実感している。本校の教職員にもその効果を知らせ、多くの教職員が取り組むようになった。また、児童生徒にも指導する機会があり、児童生徒への還元もできた。今後も続けていきたいと考えている。

5 結びに

2011年3月10日に成田空港を出発した。ということは3月11日の東日本大震災を私は経験していない。被害ができるだけ最小限になること、そして一日も早い復興を蘇州から毎日祈っていた。日本中が一丸となって復興にがんばっている時も日本にいないということに申し訳ない気持ちであった。その分、蘇州で全力を尽くそうと気を引き締めたことを思い出す。3年の間には、蘇州ではかつてなかった大規模な反日デモがあった。もちろん本校は臨時休校措置をとった。また、鳥インフルエンザの脅威に対してもいつどんなことがあっても対応できるよう危機管理をしていた。さらに、大気汚染の問題。全教室そして体育館に空気清浄機を常備した。毎日、1時間ごとにデータをとり、残念ながら屋外活動を中止とした日々が続いた。一日でも早い大気汚染の改善策を待つところである。

国内の問題や日本と中国との問題、様々であったが、出会った中国の方々は、皆、気さくで親切な人ばかりだった。中国に住み仕事をする事、家族とともに生活することは、本当に貴重な経験となった。この3年間で得た中国文化や伝統、異文化理解等を今後の国際理解教育の推進と日々の学校経営に必ず生かしていこうと強く考えている。